

僧侶3代民具1.2万点守る

長岡郡大豊町栗生の「定福寺」隣接地で、民具約1万2千点を展示する「豊永郷民俗資料館」の再建工事が進んでいる。従来の粗末な造りとは一転、工費2億円余の重厚な施設となる予定だ。ただ、寄付金で費用の大半を賄う計画で、さらに地味な民俗資料で人を呼ぶことは全国の事例からも難しい。時代を手繰り寄せようとする一大事業の背景には、僧侶3代、60年にわたる思いがある。(福田 七)

大豊町・栗生

大豊町東部の豊永郷地。それがきっかけで民具域。その山腹にたすむ定福寺は、約1300年前に行基が開いた由緒ある寺だ。同寺と民具の関わりは1955年(ろ)にさかのぼる。当時、生活様式の変化に伴い不用となった古い茶釜が、二束三文でくす鉄業者に回収されていた。その一つを当時住職だった釣井義光さん(故人)が10円で購

資料館 2億円で再建へ 「文化つなぐ使命ある」

感を抱いた義光さんは、63年(ろ)から収集活動を本格化させた。■大家も足運ぶ 義光さんは訪れた家々で法事を終え、しつこく物をそそぎ込み、床下にも入り込んだ。法衣を泥まみれにしながらか古ぼけた道具類を回収する姿を見て、「住職が狂った」とのうわさも飛び交った。67年には寺がユースホステルを開設後に廃止し、そこで民具を展示した。その後、関東や関西の大学で民俗学を学ぶ学生たちが民具の収集や整理に協力。73年にはトタン屋根の粗末な造りながら、境内に資料館が完成した。収集品は民俗学の大家、宮本常一(07〜81年)も高く評価し、何度が寺に足を

運んだ。82年には、収蔵品の2割を上回る約2600点が国の重要有形民俗文化財に指定された。■祈りそのもの 先代が民具をいとおしんだ心は、現住職の釣井龍宏さん(ろ)にそのまま引き継がれている。龍宏さんは語る。「毎日を生きたために欠かせない道具が、昔は一つ手作りされたんです。手あかと汗が染みついた道具には、農作を折り、家族の幸せを祈る心が込められている。つまり、民具は祈りそのもの。そんな「地域の命」を後につなぐ使命が、今を生きるわれわれにはあるんです」

龍宏さんの義理の息子で、同寺僧侶の釣井龍秀さん(ろ)だ。高知市出身の龍秀さんは大阪でシステムエンジニアとして働いた後、寺に入った。地域の信仰に触れる中で、その背景にある民俗にも関心を持つ。通信教育などで勉学を重ね、学芸員の熱い。「この地域で生きた一人資格を取得した。民具につ

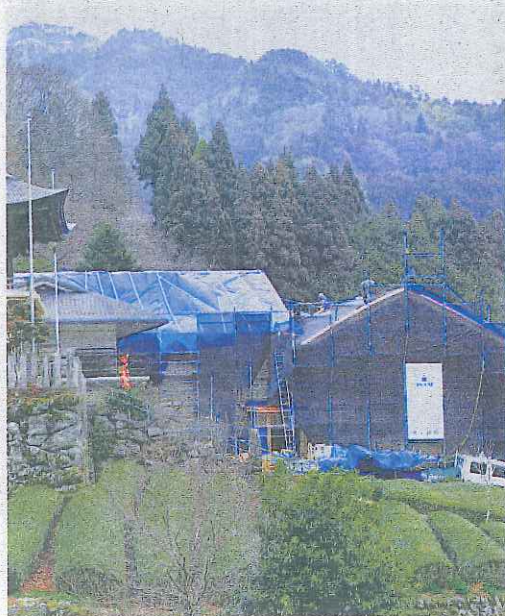
も関心を持つ。通信教育などで勉学を重ね、学芸員の資格を取得した。民具につ



1975年、「民具寺」の取り組みを紹介した本紙の写真。写真右端が現住職の龍宏さん、「おが」(のこぎり)を持つのが故義光さん



民具を手にする釣井龍宏さん(右)と龍秀さん。龍宏さんが持っているのは「胴抜き」と呼ばれる製材用のこぎり。龍秀さんが持つのは「背負子」。豊永では「おいこ」、全国的には「しよこ」と呼ばれる(大豊町の旧大豊小学校)



定福寺の隣接地で建て替え工事が進む「豊永郷民俗資料館」(大豊町栗生)



館の工事中、民具は旧大豊小で保管している。同じ種類の民具を多数そろえ、比較することにより、初めて見える地域の姿があるという

「新館の内容が万人に受けやすい。まずあり得ない。だけど、将来、一人の人が展示から何かを感じ取ってくれるかもしれない。その一人のために、民具を残したいんです」(龍秀さん)

山あいの小さな寺を拠点に、息長く続いた民具保存活動。その集大成ともいえる新資料館は、秋の開館を予定している。

新館の建設費は2億円余り。県産材の活用で県から助成金を得たといえ、頼みの綱は寄付金だ。現段階で5千万円ほど不足しているのが大きな悩みの種。それでも2人に迷いはない。

一人のために 老朽化した旧資料館は解体され、現在は新施設の工事が進む。寺は館の運営から離れ、新たに設立されたNPO法人が運営に当たっている。龍宏さんはNPO理事長として、龍秀さんは館の学芸員の立場で、それぞれ収蔵品の活用に関わっている。